北村西望と武蔵野市 彫刻に託した平和への祈り

長崎・平和公園に建つ『平和祈念像』の作者として知られる彫刻家・北村西望は69歳のとき、『平和祈念像』の制作のため武蔵野市に移り住み、初の名誉市民にもなりました。102歳で亡くなるまでこのまちに住んだ彫刻家の足跡と武蔵野市とのつながり、平和への思いを探ります。

武蔵野のアトリエから平和への願いを込めて長崎の『平和祈念像』を制作

多種多様な生き物たちの生態を間近に見ることができる武蔵野市御殿山の「井の頭自然文化園」。この一角にある「彫刻園」には、日本を代表する彫刻家の一人、北村西望のアトリエ兼住居がありました。たとえ西望の名を知らなくとも、長崎市の平和公園に建つ『平和祈念像』は誰もが知っているはず。原爆の脅威を表す天を突き指す右手、平和を願う水平にかざした左手、静かに閉じたまぶたが原爆による犠牲者への鎮魂を表す、あの有名な巨大ブロンズ像をつくったのが西望です。自然文化園の彫刻園では、『平和祈念像』の原型をはじめとする西望の作品をじっくりと鑑賞することができます。

西望は、明治17（1884）年、長崎県に生まれ、今の京都市立芸術大学と東京藝術大学を首席で卒業した後、文展（文部省美術展覧会）に出品した作品が徐々に評価され、気鋭の彫刻家として注目を集めます。大正5（1916）年には彫刻家の建畠大夢、池田勇八、国方林三とともに「八手会」を結成し、意欲的な創作活動を開始。筋骨隆々の男性をモチーフとした力強い彫刻作品で知られ、その作風は近代化へと突き進む時代の日本の躍動と重なっているようにも見えます。

第二次世界大戦の終戦から5年がたった昭和25（1950）年、長崎市から原爆による犠牲者を追悼するための記念碑建立の相談を受けた西望は、「単なる記念碑ではなく、世界平和を祈る祈念像であるべきだ」と提案し、市からの正式な依頼によって『平和祈念像』の制作に着手します。しかし、当時、北区西ケ原にあった西望のアトリエでは巨大な像の原型を制作することができず、天井が高いアトリエを確保したいと考えていたところ、東京都から井の頭自然文化園の一角をアトリエ兼住居として借りられることになり、昭和28（1953）年、西望は武蔵野市に移り住むことになりました。

「都の施設の一角を利用できた経緯については、西望が持っていたほかの美術館用の土地を戦後の都市開発のために都が接収していたため、いわば交換条件としてこの土地を借りることができたのでは、などさまざまな事情があったのではないでしょうか。そして、アトリエ用地を借りるお礼として、『平和祈念像』の原型を含む全作品を都に寄贈することを申し出ました」と井の頭自然文化園彫刻園の学芸員の土方浦歌さんは解説します。かつて西望は井の頭公園で行われた都主催の野外彫刻展に出品していたこともあるようで、周囲の環境が創作に適していると感じてこの場所を気に入っていたのかもしれません。

自然文化園の一角で5年の歳月を費やされてつくられた『平和祈念像』は、昭和30（1955）年、長崎で組み立てられ完成。恒久的な平和を祈念する象徴として今もかの地に鎮座しています。以後、このアトリエからはさまざまな作品が精力的に生み出され、西望は昭和33（1958）年に文化勲章を受章、昭和37（1962）年には武蔵野市初の名誉市民にも選ばれて市との

『花吹雪』を視察する当時の市長

取材・文／さくらい伸

関わりもより一層深いものとなっていきます。

武蔵野市に建つ西望彫刻が今私たちに語りかける愛と平和のメッセージ

武蔵野市は昭和35（1960）年に「世界連邦に関する宣言」を行いました。昭和44（1969）年、宣言10周年を記念して三鷹駅北口ロータリーに『世界連邦平和像』を建立することになり、これを西望が手掛けることに。左手に平和の聖火を掲げ、右手は宇宙を指しながら駿馬（しゅんめ）にまたがる女神像について西望は、「長崎の像は、男性を素材に最も安定した祈りの静の姿をえがいたものであり、武蔵野の像は、女性を素材に躍動する動の姿をえがいたもの」と語っています。この像の台座には世界各国（スウェーデンやウクライナなど）の48枚の石を配置し、中心には武蔵野市の戦没者の名簿が収められ、世界平和が祈念されています。ちなみに、この像の元になった『平和の女神』（1967年作）石膏原型が、自然文化園のアトリエ館と屋外に展示されています。「両作品とも、宙を駆ける馬の躍動感を表現するため雲のモチーフの上に置かれていますが、これは力学的にも大変難しい技法です。簡単なことはしたくないという西望の彫刻家としての野心の表れといえるかもしれません」と土方さん。

『平和の女神』展示風景

また、武蔵野市役所の正面玄関には、躍動感のある女性像『花吹雪』（1961年作、1980年設置）、1階の市民ホールには母親が乳飲み子を抱く『母子像』（1925年作、1980年設置）があります。「勇ましい男性像を数多く作った西望の中では比較的珍しい女性の柔らかさやしなやかさを表現した作品です。同じ『母子像』を岩手・陸前高田市に設置した際、西望は『母と子の愛はいつでも人間の心を打つ』とコメントしています。これを設置した1980年といえば西望は96歳。市役所に設置する際、市からの要望もあって女性像や母子像が選ばれたのではないかと思いますが、作風の傾向として、若い頃は筋骨隆々とした男性像、晩年は柔らかい女性像の制作・設置が増えていきました」（土方さん）

『母子像』石膏原型（1979年）

公共彫刻は、時代性や社会性、場所性と無関係ではいられません。こんにち武蔵野市が目指す「安心して子どもを産み育てられるまち」とも通じる精神が、この頃から既に市や市民の中で芽生えていて、そうした思いがこれらの像に託されていたのではないでしょうか。

武蔵野市にはほかにも、市民文化会館1階ロビーの『将軍の孫』（1918年作、1984～89年ごろ設置）と大ホールの緞帳（どんちょう）の『天地正大之気』、関係者以外は入れないものの成蹊学園内にも西望の作品が飾られています。

西望は「たゆまざる　歩みおそろしかたつむり」という言葉を好み、89歳のときには自作自像の台座に「西望芸術も　まだまだこれからだ　健康と共に油断大敵」という言葉と共に刻んでいます。98歳になっても「芸術の道は長い。これまで五百を超す作品を私は作ってきたが、いまだに気に入る作品がなかなか出来ぬ」と述懐するなど、創作への情熱は終生衰えることがありませんでした。そして、昭和62（1987）年、西望は102歳で34年間住み続けた御殿山の自宅にて死去。当時の「市報むさしの」でも囲み記事で訃報を伝えています。

世界ではいまだ争いと混乱が続き、世界平和への到達の難しさを感じることもあります。西望が彫刻に託した平和への願いを、私たちは今こそ噛（か）みしめる必要がありそうです。

〈取材協力・資料提供〉
井の頭自然文化園
武蔵野市御殿山 1-17-6
開園時間：
午前9時30分～午後5時
※原則月曜日休園

参考文献／北村西望『百歳のかたつむり』、『北村西望 百寿の譜』ほか